

障害のある子ども及びその「きょうだい」支援のための地域資源の創出の意義 ～標津町サロンときわ「サマーキャンプ」の実践から～

二宮 信一
(北海道教育大学釧路校)

服部 健治
(別海町立上西春別小学校)

小淵 隆司
(北海道教育大学釧路校)

戸田 竜也
(北海道教育大学釧路校)

玉井 康之
(北海道教育大学釧路校)

Meaning of creation of the local resources for a children with special needs and “siblings” support

Shinichi NINOMIYA, Kenji HATTORI, Takashi OBUCHI, Tatsuya TODA, Yasuyuki TAMAI

【概要】

「サロンときわ」は、標津小学校並びに標津中学校の特別支援学級在籍児童の保護者が中心となって活動している標津町における保護者ネットワークの一つである。主に、育ちや学びに困難を抱える子どもの子育て、教育などについて、保護者自身が学び合いを続けている。その活動の一つに「サマーキャンプ」があり、支援を要する子ども及びその「きょうだい」を支えるプログラムを展開している。そこで、サマーキャンプを実施するに至る経緯、その成果やサマーキャンプが持つ意味について考察した。そこには、「サロンときわ」による保護者の学びと主体形成のプロセスがあり、それは、保護者自身が地域に新たな資源を創出する契機となり、そのことが、子どもの学びや育ちを地域が支えることにつながるということが明らかになった。

1. はじめに

道東の根室管内北部、知床半島の付け根に位置し、国後島を間近に望む標津町は、人口約5,800人、面積624.49ha（東京23区とほぼ同じ）、漁業及び酪農が主な産業の町である。町内の教育・福祉機関としては、3つの保育園、2つの幼稚園、そして、2つの小学校・中学校（2012年度に2校の小・中併置校が廃校）、並びに道立高校が1校設置されている。その他、児童デイサービスセンター、子育て支援センターなどが設置されている。標津町を特別支援教育という観点から見ると、そのシステム構築上において構想されている専門機関はほとんど存在しない。児童デイサービスセンターが窓口となり、遠方の専門機関の支援を受けてはいるが、支援回数や対応出来る子どもの数は限られるのが現状である。また、発達障害に対応出来る医療機関までの距離は約100km強であり、利用するための距離的な問題と、当然、背景には経済的な問題も横たわる。このように考えると、標津町は、他の郡部やへき地同様、特別支援教育に関わる社会資源が少ない地域であるといえる。

これまでの特別支援教育は、専門機関の存在を前提としてシステム構築が進められてきたと考えられる。このことは、特別支援教育で重視されている“連携”が、専門機関との間で語られることが多いことから明らかであろう。しかし、その専門機関が存在せず、遠くの専門機関を利用

する場合には、距離的・経済的負担を保護者個人が負うことを暗黙的な前提としなければならない標津町のような町において、専門機関の存在を前提にした特別支援教育システムを構想することは、そもそも、そこに大きな歪みが生じることは想像に難くない。この歪みは、専門機関が存在しないにも関わらず、専門機関に頼るという矛盾構造、あるいは、専門機関が存在しないことを理由に、ある限界性を自らに納得させるという構造を生みだしていただろうか。すなわち、非現実的な「ないものねだり」や、資源のないことを理由に必要な支援が進められないという事態を生み出すことなどである。今、必要なことは、専門機関に過度に依存することなく、地域の保護者、療育・教育関係者など、子どもに関わる大人が、それぞれの立場で力量形成をすること、同時に地域に子どもを支えるための資源を作り出していくという試みではないかと考える。そのことが、地域において、日常的に子どもを支える力となっていくのではないだろうか。

このような考えのもと、標津町において活動している『サロンときわ』は、標津小学校の特別支援学級在籍児童の保護者が中心となって行われていた茶話会的な集まりを発展させ、2009年度から「サロンときわ」という名称で活動している標津町における保護者ネットワークの一つである。現在は標津町内のみならず、近隣の町からの参加がある。また、保護者はもとより、教員を始め、療育・福祉・行政

関係者なども参加している。基本的に月1回、日中または夜間に、標津小学校を会場に開催しており、子育てや子どもを取り巻く様々な話題・問題、日頃の疑問や悩みなどを気軽に話し合える場となっている。当初は、保護者自身の悩みや疑問を語り合う場という側面が強かったが、徐々に、参加者のニーズに合わせた学習会などの開催、さらには、保護者や教員、子ども達を対象としたワークショップ的なものの企画運営にも取り組むようになってきている。その具体的活動の一つが、支援を要する子どもとその「きょうだい」を対象にしたサマーキャンプである。この、きょうだい支援としてのサマーキャンプは、「サロンときわ」の活動を通して保護者同士が学びを深めていく中で、日頃漠然と感じていた「きょうだい支援」の必要性和重要性を再認識し、その課題を解決するために、主体的に行動を起こすことで実現した。

本稿では、地域の中で支援を要する子ども並びにその「きょうだい」を支えることの必要性和重要性、また、そのための活動と場所を地域の保護者自らが生み出すことの意味を、『サロンときわ』の活動分析、きょうだい支援キャンプの実践分析、保護者へのアンケート及び聞き取り調査を通じて考察したい。

2. 『サロンときわ』の歩み

保護者ネットワーク「サロンときわ」は、2007年度から行われていた支援学級在籍児童保護者による口コミの茶話会を、2009年度から、標津町における子育て支援に関わる保護者ネットワークへと再デザイン化を試みた実践である。再デザイン化とは、既存の資源の捉え方や見方を変え、その意味すること、活用の仕方を変える試みである。茶話会の再デザイン化のための具体的な取り組みとして、①共有するテーマの枠組みの拡大（「困難を抱える子どもの保護者の集まり」から「標津町における子育て支援ネットワーク」へ）、②定期的開催と案内配布（口コミによる連絡から案内配布へ）、③開催場所の変更（保護者の自宅による開催から小学校の空き教室での開催へ）、④参加対象者の拡大（教師・関係者をはじめ、関心のある者は誰でも参加できるオープンな形態へ）、ということを行った。月1回の例会を基本とし、随時、学習会や子どもの活動場所の提供などを行っている。2009年度から2013年度までの4年間における、「サロンときわ」の活動の概略は、次のようなものである。

最初の年、2009年度の活動は、9回の例会であった。この年は、主に支援学級在籍児童の保護者など、学びや育ちに困難を抱える保護者を対象に案内を配布した。標津町内のみならず、近隣の町からの参加もあり、一気に保護者同士のつながりが拡大した感があった。これは、茶話会から続いていた「共感や安心、課題の共有」が広がったとも考えられる。最初の参加後、自らの子どもの担任や児童デイサービスセンター担当者を誘う、発達障害に対応してい

る小児科のケースワーカーをゲストに招くなどが見られ、議題の中心は、参加した保護者の「個人の疑問、憤り、要望」が主であった。

2010年度は、計11回の例会と、2回の懇親会が開かれた。その中で、特別支援学校の経験の長い町内高校の校長を招き、2度の質疑応答や意見交換が行われた。このことをきっかけに、現時点での子どもの課題や必要な支援に関わる関心から、将来的な思春期・青年期の課題が視野に入ってくるようになった。この年は例会の話題が、前年度に見られた「個人の疑問、憤り、要望」から、参加したメンバーによる「解決のための対話」に移行していった時期であった。

2011年度は、計10回の活動のうち、3回の学習会が実施された。この学習会は、町の補助金助成によって実現した。また、この年、「広く、地域に保護者ネットワークを作りたい。」という保護者の願いから、案内を町内の小・中学校を中心に、全校的に配布することになった。町議会議員を招いての意見交換、町の福祉関係補助金の助成による学習会を行った。前述した学習会のテーマと講師は、「きょうだいの育ちを支える」（北海道教育大釧路校 戸田竜也氏）、「特別支援教育から見る高校の進路指導と教育課題」（北海道幕別高等学校 菊地信二氏）、「障がいを持つ子どもの子育て」（北海道教育大学釧路校 小淵隆司氏）である。この学習会には、保護者のみならず、保育・教育関係者、福祉関係者、一般町民など、様々な参加が見られた。また、町議会議員との2回目の意見交流では、インクルーシブ教育についての自主的な学習会が行なわれた。この年は、参加メンバーの「関心の広がり」と「自分の課題から自分達の課題」という意識が相互に高まったと考えられる。

2012年度は10回の開催であった。この年、前年度の学習会がきっかけとなり、北海道教育大学釧路校のバックアップのもと、育ちに困難さを持つ子、並びにそのきょうだい達のための「ときわサマーキャンプ」が実施された。また、町保育士会との共催によるけん玉パフォーマーの招聘並びに「けん玉&ボードゲーム研修会」の企画も行った。この年は、「サロンときわ」が地域の子どものための具体的実践に取り組み始めた年であり、同時に町内に協働できるネットワークが拡大した年でもある。この時期を「具体的実践とネットワーク拡大」と特徴づけることができる。

2013年度は9回の実施であるが、町の社会福祉協議会との共催で行った釧路への施設見学、町長との懇談、2回目のサマーキャンプ、町の栄養士を講師に迎えた親子調理実習、学習会、地元高校へ授業参観などを行った。この年の学習会には、保護者、教育・福祉関係者、町議会議員、行政関係者、一般町民など、様々な参加が見られた。子どもの活動場所の提供が増え、町内関係機関との協働企画が増えた年である。すなわち、「具体的実践とネットワーク拡大」から関係機関との「協働、相互依存」への移行期と捉えることができる。このように、「サロンときわ」の活動には、年度ごとに質的な変化が見られた。その変化は、「サ

ロンときわ」に参画する保護者の主体形成と力量形成の過程でもと考えられる。「ときわサマーキャンプ」の実施は、以上に述べたような『サロンときわ』の活動を通じた保護者自身の力量形成と主体形成の過程の中で生まれたものであると考えるのである。

3. ときわサマーキャンプの実際

(1) キャンプまでの経緯

『サロンときわ』が、きょうだい支援を目的としたキャンプを実施するまでの経緯であるが、直接的なきっかけは、2011年度に行われた3回の学習会であったと思われる。それぞれ、テーマは違ったが、学びを通して、参加者の中に自ら主体的に行動するということの重要性を実感し、意識化してきたのではないかと思われる。特に、「きょうだいの育ちを支える」(北海道教育大釧路校 戸田竜也氏)をテーマとした学習会では、戸田氏から、育ちや学びに困難さを持つ子のきょうだいの振る舞いや思いの実際について、様々な面から学ぶことが出来た。この学習会後の意見・感想を交流したとき、参加した保護者は口々に、日々、育ちや学びに困難さのある子どものきょうだいに負担をかけているという自らの思い、あるいは、気にかけてはいるけれど、実際にはゆっくりと接する時間的余裕さえもない現実、そればかりではなく、むしろ、困難な子育ての中で、きょうだいだけではなく、家族としての会話の時間、家事の時間、さらには自らの余暇の時間さえも持てない日常の重さを吐露し、語り合っていた姿が印象的であった。学習会の中で、育ちや学びに困難さを持つ子どものきょうだい達へ具体的実践の一つとして、講師の戸田氏から「きょうだい支援キャンプ」の話が紹介された。それを受け、「標準でもやれば良いね。」という漠然とした言葉は出ていたが、この時点では具体的な動きがあったわけではなかった。しかし、「きょうだい支援キャンプ」という具体的実践があるということを知ったという点では、大きな意味があったと思われる。

動きがあったのは、2012年度である。2012年度当初に、申請していた町の補助金助成が決まった。キャンプを実施する上での金銭的な条件が整ったのである。同時に、学生ボランティアなど、スタッフとしての人的条件面での支援を打診していた、2011年度学習会の講師、北海道教育大学釧路校の小淵隆司、戸田竜也両氏の全面的バックアップが得られる見通しが立った。具体的には、きょうだい支援キャンプに関するノウハウ面や備品のサポート、並びにキャンプに参加する児童一人一人に対応する学生ボランティアの募集などである。この、大学による支援は、『サロンときわ』にとって、大変心強く、また、大きな力になったと思われる。このような経緯で、2012年8月18～19日の日程で、第1回ときわサマーキャンプの実施が決定した。

キャンプ当日に向けて、全体的なコンセプト、会場、大まかなプログラム、地域の支援スタッフなどの話し合いを

重ねた。この時、話し合わせ、確認されたことは、「育ちや学びに困難さを抱える子どもと、そのきょうだいを対象とする」こと、「とにかく、参加する子ども達に、思いっきり自分の時間を過ごして欲しい。そのために、ルールやプログラムは最小限に。」ということであった。そのためには、安全面においても学生ボランティアの存在は不可欠であったが、大学側の協力のもと、参加を申し込んだ25名の子ども、一人一人に付くことが可能な人数の応募があった。この他、会場となる標津町文化ホールの使用、同じ町内施設であるサーモン科学館の利用も実現した。さらに、標津町内で活動している「標津自然塾」スタッフによる釣り指導、農協による牛乳無料提供、健康安全面で、養護教諭経験のある保護者の協力などの支援も受けることができるようになった。これらの協力が得られたのは、『サロンときわ』の活動の中で構築されたネットワークと、社会的活動を少しずつ積み重ねてきたことが、ある程度認知されていたからではないかと思われる。

(2) 第1回「ときわサマーキャンプ」

このような準備や協力のもとで行われた第1回「ときわサマーキャンプ」には、若干名のキャンセルがあったものの、最終的に21名の子ども達が参加した。そのうち、支援学級在籍児童生徒が12名、そのきょうだいが9名であった。また、就学前の子ども(年長児)が2名参加した。それに対して、学生ボランティアは25名であった。当日の大まかなプログラムは、下記の「2012年度ときわサマーキャンプ・プログラム」の通りである。

表1 2012年度ときわサマーキャンプ・プログラム

8月18日(土)	
13:30～	受付
14:00	オープニング
14:30～	プログラム①: 楽しく遊ぼう!! ～プール、釣り、サーモン科学館、 散歩など、相談して、自由に～
16:20	ホールに集合
16:30～	夕食準備
18:00～	夕食
19:00～	プログラム②: まったり過ごそう
20:30	～花火や屋内での活動～
21:00	消灯
8月19日(日)	
6:00～	朝食準備
7:00～	朝食
8:00～	プログラム②: 好きな活動
10:00	解散、児童・生徒お迎え

なお、学生ボランティアには、とにもかくにも、子ども達に付き合ってもらいたいという願いから、プログラム運営、食事準備などは、『サロンときわ』関係者(保護者と教員有志)が担当することになった。

事前にペアとなる子どもを決め、受け付けで待機する学生ボランティアに、集合時間に合わせて集まってくる子どもを引き合わせた。ある子はよそよそしく、また、ある子はすぐに打ち解けるなど、それぞれの反応があったが、オープニングが始まる頃には、参加した子どもの多くは、担当の学生ボランティアと打ち解け、学生ボランティアをあらゆることに引っ張り回す姿が見られた。学生ボランティアも、上手に子どもとの関係作りを行っていたが、中には、言語コミュニケーションの苦手なタイプの子どもの関係作りに戸惑う場面も見られた。学校のようなルールがなく、プログラムにおける活動内容が自分の選択や希望によって決まることも、子ども達にとっても新鮮なものであったようである。最初は「～してもいいの？」と遠慮がちにスタッフに聞いていた子どももいたが、次第に自分達で活動し始めた。プログラム①では、釣りをする子、サーモン科学館へ見学に行く子、プールに行く子、室内でゲームをする子など、それぞれ個人、あるいはグループでの活動が見られた。また、プログラム②でも、ホールでのボール遊び、ボードゲーム、学生との会話などが見られ、言語コミュニケーションの苦手な子にも、学生ボランティアが寄り添い、本人の好きな活動を見守る姿が見られた。特徴的だったのは、支援学級に在籍する弟を持つ姉が、学生ボランティアや小淵氏、戸田氏に自分の思いを話す姿が見られたことであった。

キャンプ2日目の朝には、解散まで2時間あまりある中、一緒に関わってくれた学生ボランティアとの別れの時間を思い、「お兄さんと別れたくない。」と涙を流す子どもの姿も見られた。それぞれに、有意義な時間を過ごせたのではないかとと思われる。学生ボランティアには、キャンプ中の子どもの様子を、その保護者に知らせるための簡単なメモをお願いしていた。解散プログラム後、迎えに来た保護者に、そのメモを渡しながら、保護者からの感謝の言葉を受ける学生、皆で記念撮影をする学生、保護者と話し込む学生の姿も見られた。解散後、『サロンときわ』関係者から、学生ボランティアに向けて、子どものこと、子育てのこと、自らの思いなどを語る場を設けた。これら一連の活動は、将来の教員を目指す教育大生にとっても、貴重な経験になったのではないかと考えている。

キャンプ実施中、子どもと一緒に参加した保護者からは「(学生ボランティアには)親には見せない、あのような表情を見せるのですね。」という言葉、キャンプ終了後には、「参加することを一番渋っていた中学生の兄が、帰ってきたら、一番楽しかったと言っていた。」という保護者の声が寄せられた。このキャンプを準備から支えた『サロンときわ』スタッフ有志は、子ども達の楽しそうな様子、保護者からの感謝の声、加えて、学生ボランティアからの感謝の声などを聞き、無事に終了できた事に安堵していた。もちろん、キャンプ運営についての反省はあったが、それよりも、自分達が地域においてきょうだい支援キャンプを実施・運営できたことの喜びを感じていた。

標津町では、平成16年度から、通学合宿を行っている。通学合宿とは、「子ども達が親元を離れ、公民館などの社会教育施設に一定期間宿泊をしながら通学する取り組み」である。通学合宿の内容は、開催する自治体によって差異があるが、標津町では、放課後、スケジュールに沿って炊事洗濯、掃除、食事の準備、学習などを共同で行っている。「ときわサマーキャンプ」終了後、数名の支援学級在籍児童が、この通学合宿に申し込み、参加した。おそらく、「ときわサマーキャンプ」を通して、キャンプの楽しさを実感し、参加への自信を得たからだろうし、保護者もまた、通学合宿に参加させることの不安が軽減したためではないかと考える。きょうだい支援という直接の目的とは違う側面であるが、「ときわサマーキャンプ」による影響の一つであると思われる。

(3) 第2回「ときわサマーキャンプ」

第1回のキャンプに参加した子ども達の保護者からは、2012年度に引き続き、きょうだい支援キャンプ実施の要望が出ていた。また、参加した子ども達からも、「今年もキャンプはあるの?」「今年も参加します。」という言葉が出ていた。前年度に引き続き、町の助成もあり、8月17～18日の日程で、第2回「ときわサマーキャンプ」が行われた。プログラムは2012年度とほぼ同様である。参加児童は前年度より増え、子ども達の参加は29名(内きょうだい10名)であった。学生ボランティアは30名の参加であった。第2回の「ときわサマーキャンプ」も、基本的に2012年度のキャンプ同様のプログラムで実施された。昨年度の反省から、テントの数を増やし、多くの子ども達がテント泊の経験が出来るように進めた。これは、子ども達の中にテントで寝た経験のない子どもが多くいたことが分かったためである。そこで、様々な経験をしてもらいたいという願いから、北海道教育大学釧路校の協力を得て実現した。昨年に引き続き参加した子どもも、初めて参加した子どもも、前年度同様に、学生ボランティアとの活動を満喫している様子が見られた。学生ボランティアは、年度ごとに募集しているため、毎回違うメンバーとなる。そのため、子ども達にとっては、昨年度と同じプログラムであっても、新たな出会いや関わりがあり、また、学生ボランティアをリードする場面も見られた。夕食時には雨模様となったが、会場のホールやテント中での、楽しそうに活動する姿が随所に見られた。プログラム自体は、ほぼ問題なく進み、昨年度同様、学生ボランティアによる担当する子どもの様子を記したメモを渡しながらの終了プログラム、その後の、学生ボランティアと地域の保護者による子育て体験談交流を経て、全プログラムを終了した。

4. アンケート及びインタビューから考察する「ときわサマーキャンプ」の意味

ここでは、キャンプに携わった関係者へのインタビュー、並びにキャンプに参加した家庭へのアンケートを通して、実際に「ときわサマーキャンプ」が子ども達や保

護者にとってどのような意味があり、何をもたらしたのかを考察したい。なお、アンケートは、参加した14家庭へ依頼し、うち11家庭から回収した。回収率は、78.6%であった。インタビューは、キャンプ実施の中心となった『サロンときわ』関係者（保護者）5名に対して行った。

「ときわサマーキャンプ」は、きょうだい支援という枠組みで実施されたものであったが、参加募集の段階で、対象を育ちや学びに困難を抱える子どもと、そのきょうだいとしたことは既に述べたとおりである。そのため、「きょうだい」の経験や活動を期待して参加させた保護者がいる一方で、困難を抱える子ども自身の活動を目的として参加させた保護者もいた。そのような状況の下で、参加した子ども達にとって、このキャンプがどのようなものであったのだろうか。

きょうだい支援を目的に参加させた保護者のAさんは、その動機について次のように述べる。

「姉はどういう感じで、本当は弟のことをどう思っているのか。まったく知らない学生さんと関わった時に、自分の本当の気持ちとか、色々なことを言えるかなと思って。」

また、Bさんは、

「うちは、とにかくきょうだい3人でキャンプを楽しめたら良いなあと思っていました。うちは、上の子にしても、下の子にしても、真ん中の子のことをどう思っているのかというのがよく分からない。まあ、上の子にしては、自分が先に生まれて、真ん中の子が生まれてからのことをずっと見ているから、“ああ、弟はこういう子なんだ”ということが、分かっているというか、あまり気にならないような感じがするのですが、下の子は後から生まれているから、“何で兄はこうなんだろう”というか、結構、自分の方が上から目線できつい言葉を平気で言うし、呼び捨てだし。」「どう思っているのかが、未だに分からないというか、そういう感じですね。」

さらに、Cさんは、

「うちもそう。」「上の兄は、弟のことをわかって、でも、もう高校生だからあまり触れることもなくなってきているけど、下の弟は、やっぱり（真ん中の子と）一緒に遊びたいというか。嫌なときはそのままズケズケ言うのです、真ん中の兄に。」

と述べている。

このような親としての思いの中、参加した子ども達であるが、例えば、Aさんの娘（障害のある子どもの姉）の場合、単に学生との交流のみならず、北海道教育大学並びにそのスタッフとの出会いが非常に大きな意味を持ったようである。その点について、Aさんは、

「もちろん、学生さんと会って、触れ合って、自分なりに感じたところはあったと思いますが、実際の教育大の先生に会ってお話しをしたというのは、やっぱり違うんじゃないですかねえ。素晴らしい機会を与えてもらったと思っています。特に、あの子にとっては。」

さらに、

「このキャンプがきっかけで、その後も、話をする機会を作ってもらえて、すごく喜んでいました。たまたま昨日、どうなるか分からないけれど、教育大に行きたいという進路希望を書いていましたよ。」と、きょうだい支援という枠組みを超えて、キャンプでの出会いと関わりが、姉が自身の進路を考える大きなきっかけになったとの報告があった。

また、Cさんは、

「今回のキャンプに行ったときは、ずっと真ん中の兄と居たのですね。全然離れなかったのです。心配で、一緒に居たのかなあ。それとも、下の子も自分から積極的に関わろうとするタイプではないので、真ん中の兄と一緒にの方が安心だったのかな。どちらかは、分からないですけど。遊ぶのも、何をするのも、ずっと一緒でしたからね。」
と言い、家庭では見られない姿が見られたとのことであった。

やはり、キャンプという非日常の空間と時間の中で、きょうだい達は日常とは違う視点と関わり方をしていることが伺われる。これは、キャンプの持つ意味の一つであろう

一方、困難を抱える子ども達にとっては、どのようなキャンプであったのだろうか。この点に関して、「ときわサマーキャンプを経験した後、期待や不安は変化しましたか。」「ときわサマーキャンプを経験した子ども達の様子や言葉で、印象的なものがあれば教えてください。」というアンケート項目から、次のような回答が見られた。

- ・自分に少し自信が付いた感じ。
- ・自分に自信が持てたようです。もっと色々やってみたいと前向きになりました。
- ・とつても（前より）明るく、良くしゃべり、自分で何でも出来る様になりました。頼られると嬉しいみたいです。
- ・うちの子も達は、「ときわキャンプ」から帰ってきた日は、必ず「すごく楽しかった」と言います。家族で遊びに行っても、みんなが楽しかったとは言わないのに、「ときわキャンプ」だけは、参加した子ども達全員が言います。私としては、とても嬉しいことです。
- ・楽しかった。また参加すると言っていました。
- ・うちの子もではないですが、子ども達がとつても楽しかったようで、お別れの日に寂しくて泣いている子がいたことです。
- ・朝方、（疲労から）発熱し、途中で帰宅したのですが、本人は「楽しかった！また（来年も）行きたい。」と目をキラキラさせて言っていたことです。
- ・「眠れなかったけど、楽しかった〜。」と、ワクワクしながら話していました。

さらに、インタビューではBさんが、

「きょうだい支援のキャンプだったのですが、きょうだいより障害のある子の方が楽しんでいたし、一番喜んでいたのが良かったですね。うちの子などは、お兄さん達、大丈夫かなと思いつつも、なんか、ちゃんということを知っていたというのは、やはり、何か楽しさや喜びがあったのだ

と思います。“ちゃんと言うことを聞くようになったんだ”という、成長も感じられたので、今年も是非やってもらいたいと思います。お手伝いするので。」と述べている。

きょうだい支援という目的で行ったキャンプであったが、育ちや学びに困難さを抱えた子ども達にとっても、貴重な活動の場となっていたことが伺われる。

次に、このキャンプに参加した子ども達の姿を、保護者はどのように受け止めたのであろうか。アンケートでは、次のような回答が見られた。

- ・子どもも大きく成長し、親も勉強になりました。
- ・親が心配するよりも子どもが大人で、何の問題もなく楽しく過ごせました。
- ・親が思うほど子どもは弱くないし、やれる状況を作れば、自分で出来るものだと改めて思いました。
- ・非日常の生活に慣れていないせいで、私の姿を探すことが多かったように思います。親離れ、子離れをしなくては…、と感じた場面がありました。

ここには、家庭とは違う子どもの姿を見た、あるいは、従来とは違う客観的な見方がなされたことが示されている。もちろん、全ての保護者がこのような感想を持ったわけではないが、キャンプへの参加が、自らの子どもの見方を変える契機になった保護者がいたことは確かであろう。

さらに、

- ・私自身も、他のお母さん、先生方、生徒の方と話したり出来て良かったです。

というアンケート回答、インタビューでDさんが、「やっていて、色々なお母さんとの情報交換なども出来たので、参加させてもらって、とても良かったなと思いました。」

と述べているように、保護者自身にとっても、新たな交流の場となっていたことが分かる。

インタビュー及びアンケートからは、以上のようなことが示された。

ところで、アンケートには、

- ・子ども達にとって、「自由に遊べる」ことが、何のストレスもなく参加できて良かった。「楽しかった」という経験が何よりです。

という回答があった。実施前も、自由度の高いプログラムは、サマーキャンプの一つの柱であったが、この点に関して、Eさんはインタビューで、

「自由さが良かったのかなと思います。子ども達はみんな、“楽しかった”と言っていましたし、保護者からも“是非、来年もやって欲しい”“継続して欲しい”という意見や言葉が多かったので、このような自由な感じでやって良かったのかなと思います。何の縛りもないというか、まあ、大まかなタイムスケジュールはありましたが、子ども達は好きなことをやれましたね。」

と、企画側として、自由度の高いプログラムの意味を再確認していた。

例えば、標津町においては、学校における宿泊学習、修学旅行、及び先に述べた行政が主催する通学合宿が、宿泊を伴う経験という意味での、子ども達にとっての資源である。いずれも、その目的とプログラム及びスケジュールは、ある程度固定化されており、きょうだい支援や育ちや学びに困難さを抱える子どもの活動に焦点化することは難しい。もちろん、学校で行われる宿泊学習や修学旅行、あるいは行政が主催する通学合宿は、それぞれに大きな意味のある活動である。しかし、これらの活動は、公共性の点からも、参加対象やプログラム内容を広く一般的に構成せざるを得ないのであり、ある種の限界性を伴うのは致し方ない。その限界性について、インタビューでAさんは、「色々なことに行政が関わるので、かえって緩く出来ない。」

と表現している。

このことは、可能な限り自由な活動の中で、育ちや学びに困難さを抱える子どもとそのきょうだいを活動させたいという『サロンときわ』の願いは、その時点における地域の既存資源では実現することが難しく、よって必然的に新たな資源を生み出す必要があったことを理解させるものであろう。このように、「ときわサマーキャンプ」は、地域における従来の既存資源では解決できない課題に対し、その限界性を認識した上で、新たな資源を創出したのであり、このことにこそ、より大きな意味を見出せるのではないかと考える。

5. 実践共同体としての『サロンときわ』と保護者の主体形成

きょうだい支援キャンプのような、従来、地域に存在しなかった取り組みを行うとき、その課題や問題を認識することと、実際に課題や問題を解決するための行動を起こすことはイコールではないと考える。すなわち、きょうだい支援という事柄が重要であり、必要であるという認識と、その問題を解決するためにキャンプを実施するという具体的行動の間には、何らかの学びの質的変化が必要であると考えられる。このことは、インタビューの際に、キャンプをやろうと考えたそもそものきっかけを、代表のEさんが次のように述べていることとも関連する。

「お母さん達は色々勉強して、それはそれで良いのですが、お母さん達ばかりが勉強しても、実際、子ども達はどうするのだということがあって、それがあって“やってみるか”ということにつながったと思います。」

さらに、筆者の「子ども達の活動場所を生み出したいという思いは、当初からあったのだろうか」という問いに、

「いえ、そうではないですね。学びのプロセスの中で、段々そう思うようになったと思います。」

と答え、『サロンときわ』による学びの中で、意識変化や主体形成が起こったことを示唆している。

では、『サロンときわ』は、どのようにしてこの学びのプロセスを生み出し得たのか。この点について、実践共同

体という概念に依拠して理解を進めたい。

実践共同体 (Communities of Practice) は、E.ウェンガーらが提唱した学習概念である。ウェンガーらは、人々が学ぶための単位 (集まり) があることを見だし、その単位を「実践共同体」と名付けた。実践共同体は、次のような三つの要素によって特徴づけられ、また、定義づけられている。

○領域 (ドメイン)

メンバーが互いに関心を寄せる特定の知識の領域

○コミュニティ

ある「領域」についての考え方を共有しながら、その領域における問題を共に学び合い、解決していくコミュニティ

○実践

ある「領域」において、コミュニティが実践的に生み出し、共有し、維持する一連の枠組みやアイデア、ツール、情報、様式、(専門)用語、物語、文書など

この実践共同体の定義を踏まえて『サロンときわ』を分析すると、以下のように整理することができる。

○領域

(困難さを抱えた場合も含む) 子育て、(支援を要する場合も含めた) 保育・教育、地域の在り方など

○コミュニティ

参加者が集まるための物理的空間を伴った「サロンときわ」

○実践

子ども理解、子育ての技、外部ネットワーク、学習会の企画運営、きょうだいキャンプなど

このように、『サロンときわ』の活動は、実践共同体としての側面を有していると言えよう。『サロンときわ』は、実践共同体であるが故に、その活動の中で、参画する保護者の学習プロセスを生み出すことが可能であったと考えられる。そこで、その学びのプロセスを、2.で述べた活動の歩みに沿って分析したのが表2である。

この表に見られるように、例会が中心であった2009年度から2010年度を経て、2011年度に学習会を行い、2012年度以降、キャンプや研修会、施設見学等々の具体的実践が増えていることが分かる。この保護者の学びの変化を段階的に示したものが、図1である。

もちろん、参加する保護者によっては、直面する問題や課題により様々な状態像が考えられるであろうし、参加する保護者個々の求めるものが、(例えば、新しく参加する保護者と、古参の保護者では) 違ってくることは言うまでもない。つまり、参画する保護者個々の状態像は動的に捉える必要があることは、留意すべき点であろう。しかしながら、実践共同体としての『サロンときわ』の活動の中で、図1に見られるような形で、保護者の学び、力量形成、主体形成がなされたとは事実であろうと考える。

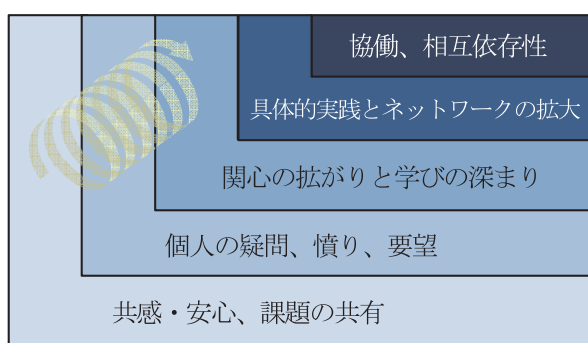
また、通常、キャンプは学校や社会体育関係者などによって企画運営されることが多い。そのため、保護者はそれらの活動を楽しむ立場であって、提供する立場ではない。つまり、通常、保護者は自らの子どもに対する様々なサー

表2 『サロンときわ』の発展過程

年度	回数	月日	内容	変化
2009年度	1	05/12	例会	共感・安心、課題の共有
	2	06/10	例会	
	3	07/16	例会	
	4	09/08	例会 (ゲスト)	
	5	10/21	例会	
	6	11/13	例会	
	7	12/11	例会	
	8	02/09	例会	
	9	03/09	例会	
2010年度	10	04/20	例会	個人の憤り、疑問、要望
	11	05/24	例会;夜	
	12	06/25	例会	
	13	07/21	例会	
	14	08/30	例会 (ゲスト)	
	15	09/29	例会	
	16	11/04	例会;夜 (ゲスト)	
	17	11/13	懇親会	
2011年度	18	03/17	例会	「自分の」から「自分たちの」課題へ
	19	05/24	例会;夜	
	20	06/27	例会	
	21	08/19	例会;夜	
	22	10/19	例会	
	23	10/25	学習会	
	24	11/22	学習会	
	25	11/30	学習会	
2012年度	26	01/30	例会 (ゲスト)	関心の広がりや学びの深まり
	27	02/29	例会	
	28	03/19	例会 (ゲスト)	
	29	05/15	例会;夜	
	30	06/14	例会 (ゲスト)	
	31	08/02	例会;夜 (ゲスト)	
	32	09/04	研修会	
	33	10/28	父親交流会	
2013年度	34	01/25	アンケート実施	具体的実践とネットワークの拡大
	35	02/08	学習会	

年度	回数	月日	内容	変化
2013年度	35	04/17	施設見学	協働 相互依存 
	36	05/02	町長との懇談	
	37	05/24	例会；夜	
	38	06/21	例会	
		8/17,18	きょうだいキャンプ	
	39	10/21	調理実習	
	40	11/16	学習会	
	41	01/10	調理実習	
	42	02/17	地元高校見学	
	43	02/24	例会	

図1 保護者活動体の発展過程



ビスを受ける立場にあるということである。しかし、『サロンときわ』がキャンプを実施する場合、サービスを受ける立場からサービスを提供する立場への、立場の転換が要求される。この立場の転換を可能にしたのも、実践共同体としての学びのプロセス、主体形成によるものであろう。

さらに、保護者自身が今回のキャンプのような、経験やノウハウがない活動を行なう場合、当然、様々な支援や援助が必要となる。このことは、例えば、サマーキャンプのプログラムを実行する上で、学生ボランティアの存在が不可欠であったことから明らかである。今回、それは北海道教育大学釧路校の協力という形で実現した。これは、学習会講師を依頼したことをきっかけとしたネットワークによって可能になった。あるいは、インタビューでEさんは、「やはり、自分達だけでやるのは難しいので、F先生やG先生など、小学校の先生がお手伝いしてくれるということも、すごく大きかったですね。」

と述べている。これは、『サロンときわ』立ち上げ当初から、関係者も共に学ぶ場として教員が参加していたことによるものであり、これも、ネットワークの一つと考えられる。これらのネットワークは、『サロンときわ』の歩みの中で構築されてきたものであり、実践共同体としての『サロンときわ』の“実践”の蓄積に他ならない。

6. まとめ

「ときわサマーキャンプ」は、保護者自らが実施したキャンプであったために、参加する子どもの顔が見え、それ故に、その子ども達の日常を支える活動を展開できた。これはまさしく、地域に暮らす子どもの日常を豊かにする試みと言えるのではないだろうか。また、このキャンプは育ちや学びに困難を抱える子どもと、そのきょうだいの活動場所を提供したということに留まらず、既に述べたように、保護者自らが、子どもの育ちや学びに関わる新たな資源を、地域の中に生み出したのであるが、『サロンときわ』という実践共同体の活動を通して、人が出会い、関係が変わり、参画する者の学びや主体形成がなされた。そのこと自体が、地域における新たな資源と言えるのではないだろうか。

先に述べたように、特別支援教育が構想する専門機関が存在する地域は、全国的には、むしろ少ないと考えられる。さらに、専門機関があったとしても、そこで行われる医療や療育は、それらが行われる場所や内容、回数を考えれば、子どもや保護者にとって非日常のものではないだろうか。専門機関の存在は重要であるが、しかし、専門機関が前提として非日常性を持つとしたならば、特に社会資源が少なく、遠方の専門機関の支援を受ける地域では、その専門機関による医療・療育の充実よりも、むしろ、子どもの日常を支えていくこと、子どもの日常を豊かにしていくことこそが重要となるだろう。そして、そのような、地域の子どもの日常的な育ちや学びを支える資源を創出していくことは、実は、保護者をはじめ、地域の大人の力によって初めて可能になるのではないだろうか。

地域には、その地域ごとの風土、歴史、文化、伝統といったものがある。その中で、自分たちの暮らす地域をもう一度捉え直し、矛盾や課題を認識し、その解決のために行動を起こすということは、地域を再定義し、地域の新たな風土、歴史、文化、伝統を形づくるプロセス、すなわち「地域づくり」の一つだと言うことができる。そして、地域住民によってなされる、地域の風土、歴史、文化、伝統を踏まえた上での「地域づくり」は、必然的に地域ごとの独自性を持つであろう。この独自性こそが、地域に暮らす困難を抱える子ども達にとっても暮らしやすい地域、すなわち地域独自のインクルーシブな環境、インクルーシブな地域社会の構築を可能にしていくのではないだろうか。このような観点から『サロンときわ』の活動、並びに「ときわサマーキャンプ」を見ると、その試みは、まさしくインクルーシブな「地域づくり」への試みの一つであり、そのことにこそ、より大きな意味と価値が見出せるのではないかと考えるのである。

7. おわりに

本稿では、『サロンときわ』に参画する保護者の学びと主体形成に焦点を当てつつ、『サロンときわ』並びに「ときわサマーキャンプ」が地域にもたらす意味と価値について考察した。しかし、『サロンときわ』が生まれ、その歩みを続ける過程では、地域の教員も参画しており、その教員が果たした役割の分析については、踏み込むことが出来なかった。『サロンときわ』に参画し、地域の保護者と共に活動した過程には、地域の教員としての新たな役割が浮かび上がる。この教員の新たな役割の分析については、今後の課題としたい。

また、インタビュー並びにアンケートに協力して頂いた『サロンときわ』関係者、保護者の皆様に、改めて感謝の意を表したい。

参考文献・引用文献

- 1) 肥後祥治「地域に根ざしたりハビリテーションCBR)からの日本の教育への示唆」特殊教育研究第41号(3)、日本特殊教育学会、2003、345～335p
- 2) マルコム・ピート「CBR地域に根ざしたりハビリテーション」、2008、明石書店
- 3) E.ウェンガー他「コミュニティ・オブ・プラクティス」、2002、翔泳社
- 4) ユーリア・エンゲストローム「拡張による学習」、1999、新曜社
- 5) 戸田竜也「よい子じゃなくていいんだよー障害児のきょうだいの育ちと支援」、2005、新読書社
- 6) 北海道教育委員会「北海道通学合宿ガイドブック」、2004